



お釈迦様は三十五歳で悟り・涅槃の境地に達しました。そこから四十五年間、悟りで得た境地を伝える伝道の旅に出ます。八十歳となるお釈迦様は体が老いていることから、自らのその長い旅の終わりが近いと自覚されます。そして最後の旅として、ラーヂヤグリハから故郷のカピラヴァストウへと向かう旅に出ます。お釈迦様は共に旅をしていたアーナンダ(阿難)というお弟子さんに自らの三ヶ月後の入滅を予言します。そして、お釈迦様は、

尋ねたパーヴァーという町で、鍛冶工のチュンダという人に施しを受けます。この食べ物スーカラ・マツダヴァというキノコ料理と言われ、食中毒と考えられる重い病気を患われます。そして病体のお釈迦様が足を運んだのが、入滅の地「クシナガラ(クシナーラー)」という場所でした。そこでお釈迦様は、沙羅双樹の間に頭を北に、顔を西に向け(頭北面西という)、右手を枕に横になります。

◎「南伝大蔵経」では「おいしい豚肉料理」とされ、漢訳仏典では「梅壇樹に生える茸の料理」とされている
臨終諷経(枕経)・・・訃報に接したならば、喪家に伺い懇ろに弔辞を述べ哀悼(くやみ)の意を表し、臨終諷経を行います、遺教経・舍利礼文三編を誦し回向。今後についてご相談する。

上来、香華灯燭浄水を供え、仏垂般涅槃略説教誡経(遺教経)・舍利礼文を誦誦す、集むる所の功德は、

【俗名○○○善男子・善女人】 新亡精霊に回向す。冀う所は四大縁謝の次いで報知を莊嚴せんことを。

お供え・・・水・団子・枕飯・一本花・一本線香

「四大縁謝」・・・地・水・火・風の縁が(謝)いとまごいをして立ち去る

「報知を莊嚴」・・・仏国土にて覚道を新たにしておくこと
地

故事「しきたり」

水……………末期の水、 佛般泥洹經卷下 T0005_01.0168a22 濁り水が澄んで水を鉢に入れて世尊に差し上げた

枕団子……………(ピンダ) T037512.0610a15 大般涅槃經に無辺身菩薩が香飯を持ち来ったが世尊は召し上がらなかつた故事による。六個……………六地藏、 十三個……………十三仏様

一膳飯……………蘇生を願った魂呼びの習慣から起ったもの、故人使っていた茶碗に大盛りにして、魂が戻って来るかもしれない、・・・供えると成仏する。・・・善光寺参りの弁当。

◎縁切りとして箸を立てる「その人だけのご飯」口伝、火炎を張り魔物を寄せ付けない。

一本花……………曼陀羅華の花で大迦葉尊者は世尊の入滅を知る。 T0007_01.0206c07:……柢(しきみ) 白菊

一本線香……………「香一炬に蒸き、雲程に奉送し」煙に乗って仏界に一途に登って行ってほしい願いから。

枕経、通夜に行かない……………過疎化、教区の統合が進むのではないか、直葬……………六件に一件・家族葬、一日葬。